

## 声楽実習②

音楽教育講座・木村 勢津

### I 授業の概要

#### 1. 目的

多角的視座から楽曲を分析し、歌唱演習を行うことにより、芸術的歌唱の意義を考究し、歌唱表現能力の向上を目指す。

#### 2. 到達目標

- (1) 楽曲を多角的視座から分析し、専門用語を用いて歌唱法について論述できる。
- (2) 学習の計画を立案し、グループ間でコミュニケーションを取りながら練習を行い、聴き手に演奏の意図が伝わる歌唱ができる。

#### 3. 関連するディプロマ・ポリシー

- (1) 地域社会における音楽文化振興に貢献するために、高い演奏技術と豊かな音楽的表現力を身につけている。(技能・表現)
- (2) 音楽文化に関する自己の学習課題を明確にして、理論と実践を結びつけた主体的な音楽活動ができる。(関心・意欲)

#### 4. 受講生の構成

登録受講生の7名。音楽文化コース4名（4年生2名，3年生2名），学校教育教員養成課程3名（4年生1名，3年生2名）であった。実際の授業は、運営上、単位認定ができない2年生以下の学生4名（音楽文化コース2年生3名，同1年生1名）も参加し、11名で行った。

#### 5. 形態・方法及び内容の概要

##### 1) 形態・方法

研究対象を主に声楽とする学生とピアノ伴奏を主とする学生がグループを形成し、自らが楽曲及び目標を設定し、毎回の授業で、グループ発表を行うことを原則として、演奏実習を中心した授業を行った。

##### 2) 内容の概要

各グループが国内外のオペラもしくは世俗歌曲の中から任意の1曲を選曲、予め受講

者間で話しあってグループを組ませた。本授業では、ドイツオペラ『ばらの騎士』（R.シュトラウス作曲）より3重唱と、民話による四重唱曲『河童譚』（石桁真礼生作曲）の2曲が選曲され、いずれも3年生と4年生の混合グループとなった。なお、後者のグループは、単位を取得できない学生2名が参加し、連弾で伴奏を務めた。

授業は全15回行い、冒頭2回で重唱の学び方の講義とディクッション演習を行った。以降13回目の授業までは、グループ発表を中心に授業を展開した。毎回の発表の冒頭で、目標と現在の課題を述べ、練習の成果を発表した後、授業者が課題の解決方法、練習方法、芸術的演奏に向けての視座等を講義した。楽曲の体裁が整い始めた授業後半には、ゲストティーチャー（以下GTと表記）を招聘し、コレペティトウアーの立場から歌唱者、ピアニストに楽曲分析方法・表現方法・歌とピアノとのコンビネーションを中心に講義、演習を行った。

#### 6. 取り組みのポイント

##### 1) 理論と実践を結びつけた音楽活動の体験

生涯学習実践者であるカルチャースクールの受講生（約70名）と音楽による交流の場を設定し、授業成果を披露すると共に、受講生の音楽に対する想いや姿勢に触れ、生涯学習において、音楽の果たす意義を体感する場を設定した。



（学外での音楽交流風景）

##### 2) 自らの演奏を多角的視座から分析し、改善できる能力の育成

演奏者としての視座に留まらず、聴き手

の視座から、楽曲に取り組み、課題を自覚し、改善できる能力を育成することを目指し、授業者以外に、GTからの助言や受講生・一般聴衆の視点から感想や助言、授業の録画DVD等のフィードバックで、客観的に自らの演奏を分析できる環境を整備し、課題解決の糸口を見つけることができるよう努めた。

## II 授業評価アンケート結果

### 1. 評価方法

授業評価アンケートは、授業最終日に無記名方式で、更に第2回目を記名方式で学外演奏後に行った。設問は、4つの選択肢（番号に沿って負の回答）からの選択方式と記述式の併用で行い、11項目を設定した。全員の受講生から回答を得た。

### 2. 評価アンケート結果

#### 1) 授業の進度

全員が適切であったと評価した。学生のスケジュールや希望でGT招聘授業日の設定を行ったことに評価を受けた。

#### 2) 重唱に関する意識の変化

重唱に対する意識の変化を86%の受講生が「大きく変わった」と回答している。全員の受講生が変化を感じていた。

＜意識変化の具体事例＞

- ハーモニーを創り出す調整の大切さ。
- 音楽の作り方に気がつくこと。
- 個々の主張とハーモニーの統一のバランスについて深く考えるようになった。等

#### 3) 各グループへのコメント

他グループへのコメントの記載については、＜積極的に記載できた＞42%、＜まあまあ積極的＞＜あまり積極的でない＞は29%であった。

#### 4) コメントをまとめた配布物の有用性

＜非常に有効であった＞43%、＜まあまあ有効であった＞57%の結果となった。

#### 5) 選曲の適正

＜非常に適切＞14%、＜適切＞57%、＜あまり適切でない＞29%の結果となった。

#### 6) 歌唱法への意識

（設問）歌唱法を具体的に考えて練習しているかの設問への回答は、＜いつも考えながら練習している＞71%、＜時々考え

る＞29%となった。

歌唱法の具体的内容として挙げられたのは発声法であった。

#### 7) ゲストティーチャーの有効性

招聘を全員が「非常に有効であった」と評価した。理由は以下のとおりである。

○ピアノのことについても考えられるようになった。

○ピアニストと共に音楽を作っているという意識が高まり、より広い視野で曲を考えることができた。

#### 8) 1週間の平均学習時間

授業準備に要した1週間当たりの平均練習時間は4～5h/w 29%、6～8h/w 57%、10h/w 14%の分布となった。

#### 9) 学外での発表について

授業で取り扱った曲の発表と交流について、自由記述形式で感想を求めた回答のごく一部が下記の内容である。

○音楽を通じてコミュニケーションすることの大切さを感じた。

○音楽を専門に学び、地域の音楽教育に寄与することの大切さを実感

○聴いていただける機会があるだけで、練習にも覇気が出る。成長も多くあった。

○「音楽を聴く」という姿勢をもつことの大切さを感じる良い機会となった。等

## III 授業成果と今後の課題

カルチャースクールの受講生との交流により、授業目標(2)について、その到達度を具体的に体感できたことは有意義であったが、選曲に関しては、受講生の学習意欲を重視し過ぎたため、達成感を十分に感じさせることができなかった。また授業目標(1)についても、アンケートの設定が不十分で、修得度について客観的に提示できなかった。授業者からの指導に加え、GTの招聘、他の受講生からのコメントが、次回授業までの目標設定や課題解決に有用であることが分かったが、授業毎にコメントをフィードバックできず、改善すべき点となった。更に「自分の演奏に精一杯で、他のグループの演奏にコメントする余裕がなかった」との回答に、異学年で行う授業において、楽曲の選曲、個々の能力への配慮が今後の課題となった。